—原著—

男性露出犯の犯行特徴と犯人像に関する分析

横田賀英子, 大塚祐輔, 倉石宏樹, 和智妙子, 渡邊和美

科学警察研究所

〒277-0882 千葉県柏市柏の葉 6-3-1

Crime scene behaviors and background characteristics of male exhibitionists

Kaeko Yokota, Yusuke Otsuka, Hiroki Kuraishi, Taeko Wachi, and Kazumi Watanabe

*National Research Institute of Police Science**6-3-1 Kashiwanoha, Kashiwa-shi, Chiba 277-0882, Japan**(Received 25 March 2013; accepted 19 August 2013)*

Characteristics of male offenders arrested in Japan for exhibitionism ($N = 414$) and features of their offences were investigated. In analyses, their behavioral consistency was also examined by focusing on 87 repeat exhibitionists. The results indicated that many offenders were well-adjusted persons: 71% were employed, 30% were married, and 23% were graduates. Moreover, 66% of the offences were committed in daytime, and 64% targeted victims aged 10–20 years. In 24% of cases, the distances between offenders' residences and crime scenes were less than one kilometer, whereas 40% of offenders lived over 5 kilometers away. In terms of behavioral consistency, offences in “trains or buses” and public spaces were shown to be consistent for repeated arrests, even after taking the occurrence rate into consideration by measures of adjusted standardized residual (ASR) and forward specialization coefficient (FSC), which is suggestive of behavioral consistency. Finally, less frequent behaviors, such as nighttime offences and offences targeting victims aged 30 years or older occurred less consistently in the series of offences. The results suggested that many exhibitionists rationally decided when and where to commit crimes, based on their calculation of risk and reward. The fact that many offenders were well-adjusted persons might be one of factors explaining offender's rational decision making. The findings in the current study can contribute to the police investigation to prioritize their investigative targets. The current research can form the basis of understanding of the nature of male exhibitionists.

Key words: Exhibitionist, Behavioral consistency, Adjusted standardized residual (ASR), Forward specialization coefficient (FSC), Offender profiling

緒 言

性犯罪における露出とは、公然と性器等を露出し、または自慰をする等のわいせつ行為をするものを指す。他の性犯罪と同様、判明している大多数の露出行為は、男性から女性に対するものである¹⁾。

アメリカ精神医学会による「精神疾患の診断・統計マニュアル第4版 (DSM-IV-TR)」²⁾では、露出症を性嗜好異常 (paraphilias) の一つとしており、その診断基準は、(A)少なくとも6カ月間にわたり、警戒していない見知らぬ人に自分の性器を露出することに関する、強烈的な性的に興奮する空想、性的衝動、または行動が反復する、(B)その人が性的衝動を行動に移している、またはその性的衝動や空想のために、著しい苦痛または対人関係上の困難が生じている、とされる。窃視症者と同様に、露出症者は、多くの場合、相手と密な接触を持とうとすることはない。しかしながら、窃視症者と異なり、自らの行為によって、ショックや驚き、困惑といった相手の反応を求める傾向が強い。

Davison et al. は、臨床心理学の概説書の中で、一般に露出症者は、異性への接近法が未熟で、対人関係に困難を抱えており、露出症者の半数以上が結婚しているが、妻との性関係は不満足なものであると述べている³⁾。また、Abel and Osborn は、性嗜好異常の治療プログラムに関わり、露出症と診断された118人に認められる性嗜好異常や性的な犯罪の行為を検討した結果、窃視症が32人 (27%)、窃触症が20人 (17%)、強姦が16人 (14%)、女兒への非近親姦的な小児性愛 (female nonincest pedophilia) が15人 (13%)、女兒への近親姦的な小児性愛 (female incest pedophilia) が14人 (12%) に認められたことを述べている⁴⁾。

露出犯の犯人特性については、過去にこうした臨床的な知見は幾つか散見されるが、露出犯のデモグラフィック的な犯人特徴について具体的に検討した研究はほとんど見当たらない。しかしながら、露出犯の一般的な犯人像を把握することができれば、犯罪捜査において優先すべき捜査対象者の属性を検討するための基礎資料となり、捜査にも貢献できることが期待できる。さらに、露出症者の治療に関しては、心理療法や精神療法が活用されているが^{1),5)}、

露出犯の一般的な特徴が明らかとなれば、これらの療法を進める上で考慮すべき要因を考える際に参考となる情報を提供することが可能になると考えられる。

また、Davison et al. は、前述の臨床心理学の概説書の中で、露出への衝動は強迫的性質をもっているために、露出行為は同じ場所で、同じ時間に頻繁に繰り返されることがあると述べている³⁾。仮に、こうした傾向が認められるのであれば、次犯行の時間帯や場所に関する予測が可能となるため、新たな被害者を出さないための防犯対策や、犯人逮捕を目的とした警察捜査に有用な情報を提供できる。また、常習的な露出犯に関しては、露出での検挙歴を複数有することが考えられるが、犯行の時間帯や場所の一貫性が見出されれば、これらの露出累犯者に対する前歴者捜査においても有効に活用できると考えられる。

露出は、発生頻度の高さに比して、他の性犯罪と同様、暗数の多い罪種である。たとえば、内山らの調査⁶⁾によると、我が国における高校生および大学生の女性676人のうち、調査対象者の半数弱を占める45.3%が、路上で男性性器を見せられた経験を有していたが、彼らのうち被害を公的機関に届けた、民間機関に相談に行った者は15人 (2.2%) であった。こうした統計は、多くの女性が露出の被害に遭遇しやすく、露出が比較的ありふれた犯罪であるにもかかわらず、警察に認知されることは少ないことを示唆している。したがって、露出に関しては、警察の認知件数以上に同様の犯罪が発生している可能性が高いことから、警察が露出事件を認知した場合には、より多くの事件が時間的・空間的に近接して発生していると考えられるため、被害拡大防止のためには、迅速かつ的確な捜査が必要である。しかし、これまでのところ、露出犯の犯行特徴に関しては、実証的な研究はほとんど存在しない。

これを踏まえ、本研究では、過去にわが国で発生した露出事件のデータを収集し、実証的に検討することにより、

- ① 露出犯の犯行特徴と犯人特徴を検討すること
- ② 露出累犯者の行動一貫性について検討すること

の二つを目的とした。

方 法

1 分析に用いたデータ

47都道府県警察のいずれかにおいて、2007年10月1日から2008年5月30日の間に露出の犯行で検挙され、情報の収集が可能であった415人のうち女性を除く男性露出犯414人について、犯行特徴および犯人特徴に関する情報を警察資料より収集した。ただし、414人の逮捕罪名は同一ではない。また、犯行特徴については、複数の事件で検挙されていた場合には、収集可能であった事件資料のうち、便宜的に最新日時の事件情報を抽出し、分析に用いた。その結果、分析対象となった414人は全て単独犯であった。なお、分析に用いた情報の管理は、部内の取り決めに従い適切に行った。

また、414人のうち、露出事件で過去に検挙された時の事件資料が収集できた者については、露出累犯者と見なした^{注1}。そして、収集された資料の中で「最新検挙時」の事件（2007年もしくは2008年に検挙）と「一番古い検挙時」の事件で行動がどの程度一致しているかについて検討した。行動の比較に当たっては、それぞれの検挙時において収集できた事件資料のうち、同一人物が複数の犯行を連続的に敢行し同時期に検挙されていた場合には、便宜的に最新日時の事件情報を用いた。

分析対象となった露出犯414人のうち、露出累犯者であると特定された者は87人であり、全体の21%であった。実際には露出の犯罪経歴を有するにも関わらず、過去の事件資料が確認できなかったために露出累犯者と特定できなかった者がいる可能性があるが、平成20年の犯罪統計（<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm>）では、公然わいせつで検挙された成人における同一罪種の前科を有する者の比率は22%（1525人中334人）であり、本研究で特定した露出累犯者の割合と同程度の比率である。

露出累犯者87人について、「最新検挙時」と「一

番古い検挙時」の犯行間隔を検討したところ、中央値は3年であり、1年未満が7人（8%）、1年以上5年未満が40人（46%）、5年以上10年未満が17人（20%）、10年以上が23人（26%）であった。また、同87人について、収集資料で確認できた露出の検挙回数を検討したところ、2回が61人（70%）、3回が15人（17%）、4回が6人（7%）、5回以上が5人（6%）であり、検挙回数が2回の者が7割を占めた。

2 分析に用いた変数

本研究では、まず、露出犯の犯行特徴（犯行時間帯、犯行場所、被害者性別、被害者年齢層、自宅一犯行地間距離）、および犯人特徴（検挙時年齢、最終学歴、職業、配偶者の有無、犯罪経歴）について検討した。各変数のカテゴリ分類についてはTable 1に示したが、いずれの変数についても、欠損値は分析から除外した。

これらのうち、犯行場所については、路上、商業・公共施設、駐車場・駐輪場、電車・バス、広場・公園、住宅、テレビ電話の7分類とし、7分類のいずれかにコーディングした。その際、路上にはバス乗り場や河川を含めた他、広場・公園には空き地も含めた。また、住宅には、一般住宅、集合住宅、寮内の犯行の他、敷地外から敷地内の被害者に向かって露出した者も含めた。

被害者の性別については、性別の記載はないが被害者の氏名が判明している場合には、氏名より性別を判断し、氏名のみからでは男女の推定が困難であった場合には欠損値とした。ただし、被害者の性別と年齢層については、複数の被害者が資料に記載されていた場合には、便宜的に一番目に記載されていた被害者についてコーディング作業を行った。

自宅一犯行地間距離については、住宅地図を搭載した地理情報システムにより計測を行った。その際、被疑者の自宅の住所については、検挙時のものを分析に用いた。ただし、犯行地が電車・バスであった47人と住所不定の6人（1人重複あり）、出会い系サイトで知り合った被害者を対象としたテレビ電話での犯行であった1人については、欠損値とした。また、自宅もしくは犯行地の住所の詳細が不明であった等の理由で郡もしくは市レベルまでしか場

注1) 同一人物が露出で複数の検挙歴を有する場合でも、それらの事件が最新検挙時の事件（2007年もしくは2008年に検挙）と同一時期の一連事件であると認められたものについては、累犯者とはみなさなかった。

所が特定できなかった者4人についても欠損値とした。郡もしくは市レベルより詳しい住所が特定できた者については、特定できたレベルまでで距離の計測を行った。たとえば、字レベルまで特定できた場合には、該当する字の任意の地点を自宅もしくは犯行地と見なして距離計測を行った。

3 行動の一貫性および反復性の指標

複数の逮捕歴を有する露出累犯者については、異なる逮捕時における犯行特徴のうち、犯行時間帯、犯行場所、被害者年齢層、犯行地の管轄警察署がどの程度一致しているか、一致していなかった場合にはどのような移行パターンが認められるか、について、欠損値は分析から除外した上で検討した。

ただし、原田ら⁷⁾は、少年の非行種別の推移について検討する中で、「ありふれた非行」を繰り返すことが「反復性が高い」と単純に言えないこと、「誰もが行う非行」とは区別した意味での「反復性の高い非行」を示す指標が必要であることを指摘した上で、海外の犯罪経歴研究で多く用いられている調整標準残差 (Adjusted Standardized Residual: ASR) および前方特化係数 (Forward Specialization Coefficient: FSC) を用いた検討を行っている。これらは、分布の偏りによる影響を補正するための指標である。本研究でも、累犯者の行動の一貫性および反復性の指標として、ASR および FSC を同時に用いた。それぞれの式は、以下に示すとおりである。

$$ASR = \frac{O - E}{\sqrt{[1 - (R/T)][1 - (CR/T)]}}$$

$$FSC = \frac{O - E}{R - E}$$

(O = 観測度数, E = 期待度数, R = 行の周辺度数, C = 列の周辺度数, T = データ数)

ちなみに ASR は、近似的に標準正規分布にしたがうため、前回の犯行と今回の犯行とが相互に独立だという想定を帰無仮説とし、この想定のもとでの期待値からの各セルの観測値の乖離が、統計的に有意であるかどうかを検討することができる。他方、FSC は、サンプル数の大小に依存しないという特徴をもち、期待値と観測値とが一致する場合にゼロ、前回あるカテゴリだった者全員が今回特定のひ

とつのカテゴリに集中した場合に1の値をとるため、専門分化傾向などの強度を比較するための指標として優れているという⁷⁾。

結 果

1 露出事件の犯行特徴と犯人特徴

(1) 犯行特徴

Table 1に、本研究で分析対象となった男性露出犯の犯行特徴について示した。

まず、時間帯や場所については、昼間の犯行が全体の66%、バス・電車を除く公共空間（路上、商業・公共施設、広場・公園、駐車場・駐輪場）にお

Table 1 Crime scene behaviors of male exhibitionists.

Time of offence ($N=413$)	Daytime (6:00–18:00)	66%
	Nighttime (18:00–6:00(next day))	34%
Place of offence ($N=414$)	Street	40%
	Commercial/public facility	22%
	Car/cycle parking space	15%
	Train/bus	11%
	Open space/park	7%
	Residence site	5%
	Television-phone	0%
Victim gender ($N=403$)	Female	75%
	Male	10%
	Unspecified	15%
Victim age ($N=353$)	9 years old or under	2%
	10–19 years old	30%
	20–29 years old	34%
	30–39 years old	16%
	40–49 years old	8%
	50–59 years old	7%
	60–69 years old	2%
	70 years old or over	1%
Distance between offender's residence and crime scene site ($N=357$)	Less than 1 km	24%
	1–2 km	13%
	2–3 km	11%
	3–4 km	8%
	4–5 km	4%
	5–10 km	16%
	10–50 km	18%
	50 km or longer	6%

ける犯行が84%を占めた。公共空間の中でも、特に、路上が40%を占め、最も多かった。なお、テレビ電話の該当数は1であったため小数点以下を四捨五入すると0%となったが、その具体的内容は、出会い系サイトで知り合った被害者にテレビ電話をかけて露出を行ったものであった。

被害者の性別および年齢層については、複数の被害者がいた場合には、便宜的に最初に記載されていた者のみを分析対象としたが、被害者の性別については、欠損値を除くとデータ有効率は97%であった。有効であったデータより、不特定の相手に露出しており、資料から被害者の性別が特定できなかった事件(15%)を除けば、女性が75%を占めた。また、被害者の年齢層については、データ有効率は85%であり欠損値が多かったが、欠損値を除いた353人の事件については、多い順に、20歳代が34%、10歳代が30%、30歳代が16%であり、特に、10歳代から20歳代の若年層がターゲットとなる傾向が強いことが示された。

犯人の自宅と犯行地の距離については、犯行地が電車・バスもしくはテレビ電話での犯行であった者、住所不定者、および詳細な住所が不明であった者を除く357人について分析した。その結果、24%の者が犯行地点から1 km圏未満に居住していた。しかしながら、居住地が犯行地点から5 km圏以上であった者も4割を占めており、犯人が近隣居住者でない場合も多かった。中央値は3 km(小数点以下は四捨五入)であった。

(2) 犯人特徴

次に、犯人特徴について検討した結果を示す(Table 2)。

犯人の検挙時の年齢層は、多い順に、30歳代(28%)、40歳代(23%)、20歳代(21%)であり、20歳代から40歳代が多くを占めた。

最終学歴のデータ有効率は76%であったが、最終学歴が記載されていた者314人のうち、高校・短期大学・専門学校・専修学校卒業のいずれかであったものが50%、中学校もしくは養護学校卒業であった者が26%、大学卒業以上であった者が23%であった。なお、中学校卒業には、旧制小学校および青年学校が最終学歴であった計2人も含まれている。ち

Table 2 Background characteristics of male exhibitionists.

Age at arrest (N=414)	10-19 years old	3%
	20-29 years old	21%
	30-39 years old	28%
	40-49 years old	23%
	50-59 years old	15%
	60-69 years old	8%
	70-79 years old	2%
	80 years old or over	1%
Academic background (N=314)	Junior high school/school for the disabled	26%
	High school/two-year college/career college/special training school	50%
	University	23%
Occupation (N=414)	Employed	71%
	Unemployed	30%
Marriage status (N=414)	Married	30%
	Married in past/having child	2%
Criminal history (N=411)	Any	52%
	None	49%

なみに、先行研究では、男性の年少者強姦犯の大卒者の割合は2.5%⁸⁾、13歳以上の女性被害の屋外での男性強制わいせつ犯で犯行時に加害者と被害者の面識がなかった者の大卒者の割合は6.7%⁹⁾であり、本研究における露出犯のデータにおいて大卒者が23%を占めたという結果は、強姦や強制わいせつといった他の接触型の性犯罪と比較すると高い比率であると考えられる。

職業に関しては、アルバイトも含めると71%が有職者であったが、職種は様々であった。有職者の職種を詳細に検討すると、全414人のうち、会社員・公務員・経営者・団体専従もしくは農林漁業従事者等が31%、職人・手職・工員・労務者等が28%、飲食営業・風俗関係者が8%、自由業が2%、セールスマン・集金人等が1%であり、比較的安定した職に就き生計を立てていると考えられる者が多く認められた。また、無職者30%のうち、学生が3%であった。

また、婚姻状況に関しては、記載のない者や、内妻、交際者がいることのみ確認できた者が68%を占

めた一方で^{注2}、妻帯者であることが確認できた者も30%認められた。妻帯者以外の者の中で離婚歴を有することが明確であるか、結婚歴は不明であるが子どもがいることが確認できた者は2%であった。

犯罪経歴については、3人は不明であったが、残りの411人については、何らかの犯罪経歴を有する者が52%を占めた。犯罪経歴の内訳について検討すると、最も多くを占めたのはわいせつであり、全体の29%であった。わいせつには、強姦、強制わいせつ、公然わいせつ、わいせつ物頒布等が該当するが、本研究で用いたデータでは、強姦もしくは強制わいせつであることが確認できた場合にはわいせつに含めず、それぞれ別個にカウントした。性的要素を含む可能性のある罪種において、次に比率が高かったのは、迷惑防止条例違反と住居侵入であり、それぞれ全体の9%の者がこれらの犯罪経歴を有していた。一方で、強制わいせつや強姦（強盗強姦を含む）といった接触型の性犯罪の犯罪経歴を有していたことが確認できた者は、それぞれ3%と1%であり、あまり多く認められなかった。また、風営適正化法もしくは青少年条例違反に該当した者も1%で認められた。ちなみに、露出果犯者であることが確認できた者は87人（21%）であったが、その87人から犯罪経歴の詳細が不明であった者を除いた86人においても、強制わいせつの犯罪経歴を有することが確認できた者は7%、強姦歴を有することが確認できた者は2%にとどまった。また、性的犯罪以外で多く認められたのは窃盗歴（占有離脱物横領を含む）であり、全体の18%が該当した。粗暴犯歴（暴行・傷害・暴力行為・恐喝）を有していた者は8%、凶悪犯歴（殺人、強盗、放火）を有していた者は2%であった。

2 露出果犯者の行動一貫性と移行性

次に、露出果犯者であることが確認された者（87人）について、「犯行時間帯」、「犯行場所」、「被害者年齢層」、「犯行地の管轄警察署」の4変数の一貫

^{注2} 配偶者や子に関しては、参照した書類のいずれかの欄に配偶者もしくは子について何らかの記載があった場合に、既婚者や結婚歴あり（もしくは子あり）と見なした。したがって、カウントされなかった場合には、独身である場合と、配偶者がいても参照した書類に記載されていなかった場合の2通りの可能性がある。

Table 3-1 Categories of “Time of offence” of the most recent and oldest cases (N=79).

		Oldest cases		Total
		1	2	
Most recent cases	1 Daytime (6:00–18:00)	41 (71%)	17 (29%)	58 (100%)
	2 Nighttime (18:00–6:00 (next day))	10 (48%)	11 (52%)	21 (100%)
合 計		51 (65%)	28 (35%)	79 (100%)
Concordance rate = 66%				
Cramer's $V=0.21$				
Adjusted Standardized Residual (ASR)				
		Oldest cases		
		1	2	
Most recent cases	1 Daytime (6:00–18:00)	1.89	–1.89	
	2 Nighttime (18:00–6:00 (next day))	–1.89	1.89	
NOTE) *: $p<.05$, **: $p<.01$.				
Forward Specialization Coefficient (FSC)				
		Oldest cases		
		1	2	
Most recent cases	1 Daytime (6:00–18:00)	0.17	–0.09	
	2 Nighttime (18:00–6:00 (next day))	–0.48	0.26	

性と移行性について検討した。前者3変数については、Table 3-1からTable 3-3に「最新検挙時」と「一番古い検挙時」の事件の行動を比較した結果を示した。各表にはそれぞれ、変数の出現頻度に関するクロス集計、ASR, FSC が記載されている。

まず、犯行時間帯については、Table 3-1に示すように、全体のカテゴリ一致率は66%、クラメールの連関係数は0.21であった。クラメールの連関係数について、菅¹⁰⁾は、0.25以上0.5未満であれば両者の間にやや強い連関があるとの基準を示しているが、この基準にしたがえば、犯行時間帯の連関は低いとみなすことができる。各カテゴリについて検討すると、「最新検挙時」が昼間（6:00～18:00）の犯人では、「一番古い検挙時」の事件でも昼間の犯行であった者は71%であった。他方、「最新検挙時」の犯行が夜間（18:00～翌日6:00）であった場合

Table 3-2 Categories of “Place of offence” of the most recent and oldest cases ($N=82$).

		Oldest cases						Total
		1	2	3	4	5	6	
Most recent cases	1 Street	21 (57%)	3 (8%)	2 (5%)	5 (14%)	3 (8%)	3 (8%)	37 (100%)
	2 Commercial/public facility	4 (24%)	9 (53%)	4 (24%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	17 (100%)
	3 Train/bus	0 (0%)	2 (18%)	9 (82%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	11 (100%)
	4 Open space/park	3 (38%)	1 (13%)	0 (0%)	2 (25%)	1 (13%)	1 (13%)	8 (100%)
	5 Car/cycle parking space	2 (33%)	2 (33%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (33%)	0 (0%)	6 (100%)
	6 Residence site	3 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (100%)
合 計		33 (40%)	17 (21%)	15 (18%)	7 (9%)	6 (7%)	4 (5%)	82 (100%)

Concordance rate = 52%

Cramer's $V=0.44$

Adjusted Standardized Residual (ASR)

		Oldest cases					
		1	2	3	4	5	6
Most recent cases	1 Street	2.76**	-2.56*	-2.74**	1.46	0.25	1.23
	2 Commercial/public facility	-1.58	3.68**	0.63	-1.41	-1.30	-1.05
	3 Train/bus	-2.93**	-0.22	5.86**	-1.09	-1.00	-0.81
	4 Open space/park	-0.17	-0.60	-1.41	1.75	0.59	1.05
	5 Car/cycle parking space	-0.36	0.79	-1.20	-0.78	2.54*	-0.58
	6 Residence site	2.15**	-0.90	-0.83	-0.54	-0.50	-0.40

NOTE) *: $p < .05$, **: $p < .01$.

Forward Specialization Coefficient (FSC)

		Oldest cases					
		1	2	3	4	5	6
Most recent cases	1 Street	0.28	-0.16	-0.16	0.05	0.01	0.03
	2 Commercial/public facility	-0.28	0.41	0.06	-0.09	-0.08	-0.05
	3 Train/bus	-0.67	-0.03	0.78	-0.09	-0.08	-0.05
	4 Open space/park	-0.05	-0.10	-0.22	0.18	0.06	0.08
	5 Car/cycle parking space	-0.12	0.16	-0.22	-0.09	0.28	-0.05
	6 Residence site	1.00	-0.26	-0.22	-0.09	-0.08	-0.05

には、過去も夜間であった者は52%であり、昼間の場合よりも一致率は低かった。また、「最新検挙時」と「一番古い検挙時」の事件の犯行時間の差で検討した場合、差が3時間未満であった者が46%、3時間以上6時間未満であった者が17%、6時間以上9時間未満であった者が15%、9時間以上12時間未満であった者が22%であった。すなわち、6時間未満の者が6割強であり、露出累犯者の多くが比較的近接した時間帯の犯行を繰り返していたことを示す。ただし、ASRおよびFSCによって、分布の偏りを補正し、犯行時間帯の一貫性および移行性を検討し

た結果では、FSCについては、カテゴリが一致するセルについては、正の値が得られ、カテゴリが不一致のセルについては負の値が得られたが、ASRはいずれのセルも統計的に有意ではなかった。

犯行場所については、Table 3-2に示すように、全体のカテゴリ一致率は52%、クラメールの連関係数は0.44であり、やや強い連関が認められた。そして、電車・バスの発生であった場合に一致率が最も高く、「最新検挙時」の犯行が電車・バスであった者のうち、82%が「一番古い検挙時」においても電車・バスの犯行であった。また、「最新検挙時」が、

Table 3-3 Categories of “Victim age” of the most recent and oldest cases ($N=65$).

		Oldest cases							Total
		1	2	3	4	5	6	7	
Most recent cases	1 9 years old or under	0(0%)	2(100%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(100%)
	2 10-19 years old	0(0%)	13(59%)	3(14%)	5(23%)	0(0%)	0(0%)	1(5%)	22(100%)
	3 20-29 years old	0(0%)	6(27%)	9(41%)	5(23%)	1(5%)	1(5%)	0(0%)	22(100%)
	4 30-39 years old	0(0%)	3(38%)	5(63%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	8(100%)
	5 40-49 years old	0(0%)	1(25%)	2(50%)	1(25%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	4(100%)
	6 50-59 years old	0(0%)	2(33%)	3(50%)	1(17%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	6(100%)
	7 60-69 years old	0(0%)	1(100%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
合 計		0(0%)	28(43%)	22(34%)	12(19%)	1(2%)	1(2%)	1(2%)	65(100%)
Concordance rate = 34%									
Cramer's $V=0.24$									
Adjusted Standardized Residual (ASR)									
		Oldest cases							
		1	2	3	4	5	6	7	
Most recent cases	1 9 years old or under	.	1.65	-1.03	-0.68	-0.18	-0.18	-0.18	
	2 10-19 years old	.	1.86	-2.46*	0.63	-0.72	-0.72	1.41	
	3 20-29 years old	.	-1.84	0.86	0.63	1.41	1.41	-0.72	
	4 30-39 years old	.	-0.34	1.83	-1.44	-0.38	-0.38	-0.38	
	5 40-49 years old	.	-0.75	0.70	0.35	-0.26	-0.26	-0.26	
	6 50-59 years old	.	-0.51	0.88	-0.12	-0.32	-0.32	-0.32	
	7 60-69 years old	.	1.16	-0.72	-0.48	-0.13	-0.13	-0.13	
NOTE) *: $p < .05$, **: $p < .01$.									
Forward Specialization Coefficient (FSC)									
		Oldest cases							
		1	2	3	4	5	6	7	
Most recent cases	1 9 years old or under	0.00	1.00	-0.51	-0.23	-0.02	-0.02	-0.02	
	2 10-19 years old	0.00	0.28	-0.31	0.05	-0.02	-0.02	0.03	
	3 20-29 years old	0.00	-0.28	0.11	0.05	0.03	0.03	-0.02	
	4 30-39 years old	0.00	-0.10	0.43	-0.23	-0.02	-0.02	-0.02	
	5 40-49 years old	0.00	-0.32	0.24	0.08	-0.02	-0.02	-0.02	
	6 50-59 years old	0.00	-0.17	0.24	-0.02	-0.02	-0.02	-0.02	
	7 60-69 years old	0.00	1.00	-0.51	-0.23	-0.02	-0.02	-0.02	

路上や、商業・公共施設であった場合も、それぞれ 57%、53% で一番古い検挙時においても同カテゴリの犯行であった。他方、広場・公園、駐車場・駐輪場については、同カテゴリの犯行の一致率は 25%、33% であった。しかしながら、路上、商業・公共施設、広場・公園、駐車場・駐輪場を包括して、乗り物を除く「公共空間」といった枠組みで捉えると、「最新検挙時」に「公共空間」の犯行であった者の

うち 71% が、一番古い検挙時の事件でも「公共空間」での犯行を行っており、一致率はかなり高かった。また、ASR および FSC によって分布の偏りを補正して一貫性および移行性を検討した結果では、FSC については、カテゴリ一致の該当数がゼロであった住宅以外では、カテゴリが一致するセルについては正の値が得られ、それらの ASR も広場・公園以外では統計的に有意であった。特に、「最新検挙時」、

「一番古い検挙時」の双方が電車・バスであるセルについては、FSCが0.78と最も高く、次いで、商業・公共施設（0.41）が高かった。また、「最新検挙時」、「一番古い検挙時」の双方が、上述の「公共空間」であった場合のASRは4.00（ $p < .05$ ）であり、構成比の大きさを補正しても「公共空間」の一貫性は高いことが示された。

被害者年齢層については、全体のカテゴリ一致率は34%、クラメールの連関係数は0.24であり、「最新検挙時」と「一番古い検挙時」の連関は低かった。「最新検挙時」と「一番古い検挙時」の一致率が高かったのは、10歳代（59%）と20歳代（41%）であった（Table 3-3）。ASRおよびFSCによって分布の偏りを補正して一貫性および移行性を検討した結果では、ASRについては、被害者年齢層が20歳代から10歳代に移行した者が該当するセルのみが5%で負の方向に有意であった他は、有意なセルは存在しなかった。また、「最新検挙時」に30歳代以上の被害者をターゲットにしていた者については、いずれもサンプル数は1桁で少なかったが、「最新検挙時」の被害者年齢層が60歳代であった1名が過去に10歳代の被害者をターゲットにしていたことを除けば、過去の検挙時には20歳代をターゲットにしていた者が該当するセルが他の年齢層よりも高く、FSCも正の値であった。この結果は、「最新検挙時」に30歳代以上の被害者をターゲットにしていた者の多くが、「一番古い検挙時」には20歳代の被害者をターゲットにしていたことを示す。

最後に、表に記載はないが、「最新検挙時」と「一番古い検挙時」の犯行地の管轄警察署について検討した結果、累犯者87人のうち、「最新検挙時」と同一の警察署管内で「一番古い検挙時」の事件を行っていた者が27%、同一都道府県内の異なる警察署管内で犯行を行っていた者が51%、異なる都道府県で犯行を行っていた者が22%であった。この結果は、同一警察署管内での犯行を繰り返していた者が3割程度いた一方で、過去の犯行場所が異なる府県であった者も、2割以上いたことを示している。

考 察

分析の結果、わが国における露出事件の主特徴と

して、昼間の犯行が7割弱、10歳代から20歳代の被害者を対象とした犯行が6割強を占めることが見出された。また、不特定の被害者に露出しており、被害者の性別が特定できなかったものが15%を占めた他は、7割強が女性であった。これらの特徴は、犯人が、潜在的な被害対象者に容易に遭遇できるであろう場所や時間帯を選択した結果であると考えられる。また、時間帯に関しては、昼間であれば、視認性が高く、露出もより効果的であるという理由に起因している可能性もあるだろう。

犯人の自宅から犯行地までの距離については、2割強が犯行地点から1 km圏未満に居住していた一方で、車両もしくは公共交通機関が必要と思われる5 km圏以上に居住していた者も4割を占めた。自宅の住所については、検挙時の住所を分析に用いたため、転居等で自宅が移転した可能性はあるが、露出が必ずしも、自宅近隣で衝動的に行われる犯行ではないことが示唆された。

これらの結果は、犯人にとって、自宅から現場までの近さよりも、自分の見知っている人物に遭遇するリスクや逮捕リスクを低くすること、もしくは潜在的な被害者に遭遇する可能性がより高いであろう場面を選択することの方が重要であることを示唆している。藤岡¹¹⁾は、意図的に被害者と加害状況を選択するという点において、多くの性暴力は自身の欲求を充足させるという目的に沿った、合目的的行動であることを述べている。露出は、被害者との接触が短時間で、被害者とのインタラクションもほとんどないことから、綿密な準備や計画性は強姦や強制わいせつといった接触型の性犯罪ほど求められない犯罪であるにも関わらず、露出犯も他の接触型の性犯罪と同様に、逮捕のリスクと、潜在的被害者への遭遇しやすさといった報酬を計算した上で、自分が適切と考える時間および場所において犯行に及ぶという合理的選択理論の枠組みに沿った犯行を行うことが比較的多いことが考えられる。

犯人特徴については、20歳代から40歳代が多くを占めた。そして、半数強が犯罪経歴を有していた一方で、大卒の高学歴者、有職者、妻帯者等、一見、社会的にうまく適応していると考えられる者も見出された。特に、大卒の占める割合が23%であった

が、これは、過去の研究から見出されている接触型の性犯罪と比較すると、高い比率であった。また、職業についても、会社員・公務員・経営者・団体専従もしくは農林漁業従事者等が31%を占めており、安定した職に就き生計を立てていると考えられる者が少なくなかった。これらの結果は、露出が接触型の性犯罪と比較すると、比較的社会適応のよい者であっても犯行に至ることのある犯罪であることを示唆している。そして、こうした犯人像は、露出犯の多くが、リスクと報酬を計算した上で、犯行の時間帯や場所を合理的に選択して犯行に及んでいると考えられることとも適合すると考えられる。

また、犯罪経歴に関しては、強姦や強制わいせつを除くわいせつや窃盗歴を有する者がそれぞれ2, 3割程度いた一方で、同じ性犯罪でも接触型の強姦や強制わいせつ、もしくは殺人、強盗、放火、強姦といった凶悪犯罪の犯罪経歴を有していた者は数パーセントに過ぎなかった。したがって、露出犯が、接触型の性犯罪歴や凶悪犯罪歴を過去に有している比率は高くないと考えられる。冒頭に述べたように、Abel and Osborn⁴⁾の海外の研究では、露出症者のうち、窃視症、窃触症、強姦、非近親姦および近親姦的小児性愛といった他の性嗜好障害や犯罪的行為が同時に認められた者がそれぞれ1割から3割弱程度認められたが、少なくとも犯罪経歴を分析する限りにおいては、今回分析対象となった露出犯においてそのような傾向は確認できなかった。ただし、今回分析対象となった露出累犯者の7%が過去に強制わいせつ歴を有していたことは、露出と強制わいせつを両方敢行する者が一定数存在することを示唆している。

さらに、露出累犯者の手口を異なる検挙時で比較した結果、前述した露出の主特徴である、昼間や10歳代から20歳代の被害者に対する犯行といった手口については、比較的一致する傾向が見出された。ただし、これは、元の構成比が大きいことによる結果であると考えられた。他方、「電車・バス」や「公共空間」といった犯行場所については、ASRやFSCによって分布の偏りを補正しても一致率が高かった。その一方で、出現頻度のより低い、夜間や30歳代以上の被害者といった特徴が一致する割合

は、それらより低かった。この結果は、30歳代以上の女性が被害者である場合には、機会的な要因でそれらの被害者が選択された可能性が高く、被害者の年齢層が高い場合、犯人にとって被害者の年齢層は大きな意味を持たない場合が多いことを示唆していると考えられる。

以上述べた本研究の結果は、露出犯の特徴や行動の移行性の一面を計量的に示したものであり、露出に対する防犯対策や捜査活動、および露出症の心理・精神療法を行う上で活用可能な基礎的な知見であると考えられる。露出に関する先行研究は散見されるものの、分析対象が露出症と診断された者に限定されていたり⁴⁾、経験的もしくは臨床的知見から露出犯について考察したものが多く^{1,3,5)}、露出に関する実証的研究はほとんど見当たらない。本研究は、警察が検挙した露出犯について全国的なデータを収集し、その特徴や累犯者の行動の移行性について実証的に検討したという点において一定の意義を持つと考えられる。

まず、昼間の時間帯や10歳代から20歳代の被害者が対象となりやすく、異なる検挙時においてもそれらの特徴が反復されやすいという結果を踏まえれば、露出事件が発生した際の各種の警察活動は、昼間、10歳代や20歳代の女性が通行する可能性の高い場所（たとえば、高校生が比較的よく通るであろう通学路）を集中的に行うべきであることを示している。そして、比較的年齢層の高い被害者が対象となった事件が発生した場合であっても、犯人が状況的要因で機会的にそれらの女性を対象とした可能性が低いことから、同一犯人による次回犯行の犯行形態を予測する際には、10歳代から20歳代の被害者が対象となる可能性をより高く見積もるべきである。

また、犯人検挙のための捜査活動において、捜査エリアや捜査対象者の優先順位付けを行う際には、犯行現場から3 km以内に居住している者、犯罪経歴保有者がそれぞれ半数程度を占めること、犯罪経歴のなかで該当する可能性が高いのはわいせつであること、仮に同種の犯罪経歴を有すると推定する場合には、電車・バスにおける犯行は異なる検挙時においても反復性が高いこと等の知見は活用すべきで

ある。

さらに、今回分析対象となった露出犯のうちの一定数が、社会的、経済的に大きな問題なく生活していたと考えられるという結果は、露出症者に対する精神療法や心理療法を行う上で考慮すべき知見であろう。Sadock and Sadock¹²⁾は、露出症の男性は、性器を露出し、被害者の恐怖、驚愕、嫌悪などの反応を見ることで、男らしさの確認をしようとしている他、Bartol and Bartol¹³⁾は、多くの露出症者は脆弱な自尊心に打撃を受けて不安全感とストレスが高まり、それに続いて露出したいという衝動を感じると述べている。さらに、大江ら¹⁴⁾は、性非行のリスク要因の一つとして、社会的安定性や適応をあげた上で、治療や処遇にあたって環境調整に重点を置くことの重要性を述べているが、露出犯の場合においても、環境からのストレスが自尊心への打撃となり、露出の契機になっている例は少なくないと考えられる。すなわち、社会的、経済的に大きな問題なく生活していた者が露出に至る心理社会的な背景としては、仕事や家庭生活等におけるストレスが大きくなり、元々有していたであろう性的欲求の抑制が困難となり、性犯罪の中でも被害者との接触がほとんどないために、逮捕リスクが低く、かつ被害者への身体的な加害行為のない露出に及んだことが可能性として考えられる。性嗜好異常の治療として、Sadock and Sadock¹²⁾は、幾つかの精神医学的な介入方法を挙げた上で、特に、洞察試行的精神療法においては、治療を受けることで、自分を性的な衝動行為に駆り立てる日々の出来事を知るようになり、より上手く日常のストレスに対処できるようになり、人生の伴侶と関係を築くための能力を増やすことができるとしている¹²⁾。前述したような、日常生活における高ストレスが犯行の大きな引き金になっている者に対する療法においては特に、彼らが犯行に至ってしまった心理社会的な背景を配慮した関わりや周囲の人々の関わり方を含めた環境調整、ならびに日常のストレスに対処できる能力を強めることが必要であろう。

また、今回分析対象となった露出犯414人のうち、3割近くがわいせつの犯罪経歴を有していた他、露出累犯者であると特定された者が全体の21%

を占めたとの結果は、露出を繰り返す者が少なくないことを示す。特に、露出の場合、ストレスを受けたあとや無力感を持ったあとに、好ましい被害者に露出することができるならば、露出は不快な感情状態に対する有効な方法として学習された反応となるため、反復的に行われ、消去されにくいと考えられる¹³⁾。近年、法務省において、認知行動療法の理論を基礎とした再犯防止プログラムとして、刑事施設内における性犯罪再犯防止指導や保護観察における性犯罪者処遇プログラムが組織的に実施されているが¹⁵⁾、本研究で分析対象となった露出犯の2割から3割が過去にも同様の事件で検挙されていたとの結果は、露出犯においてもこうした再犯防止プログラムが重要であることを示している。

ただし、本研究では限られた事件資料を元にコーディングしたデータを用いたため、犯人の被害者への接触方法といった詳細な犯行特徴や、犯人の対人行動様式といった特徴等、重要な変数が欠落している。また、露出で検挙された者が、過去に露出以外の性的逸脱行為を行っているか否かを正確に把握するためには、警察が把握していない事件の暗数が多いことが考えられるため、犯罪経歴からのみ検討するのではなく、臨床場面等で彼らから直接面接をして聴取する必要があるだろう。したがって、露出犯の行動についてより詳細に検討するためには、研究目的に則した調査を実施し、より詳細なデータを収集する必要があると考えられる。

今後は、本研究で見出された知見を元に、犯罪者が露出に至る心理プロセスについてより多面的に検討することによって、露出犯についてさらに深いレベルでの理解が可能になると考えられる。

文 献

- 1) 針間克己, 露出症. 別冊日本臨牀 領域別症候群シリーズ, **39**, 288-290, 2003.
- 2) American Psychiatric Association, *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed., Text Revision*. American Psychiatric Association, Washington, D. C., 2000. (高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸 (訳) DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 東京, 2003.)

- 3) Davison G. C., Neale J. M. and Kring A. M., *Abnormal psychology. 9th ed.*, John Wiley & Sons, Inc., New Jersey, 2004. (下山晴彦(編訳) テキスト臨床心理学 5—ライフサイクルの心理障害. 誠信書房, 東京, 2007.)
- 4) Abel G. G. and Osborn C., The paraphilias: The extent and nature of sexually deviant and criminal behavior. *Psychiatr. Clin. North Am.*, **15**, 675–687, 1992.
- 5) 針間克己, 性非行少年の心理療法. 有斐閣, 東京, 2001.
- 6) 内山絢子, 及川里子, 加門博子, 高校生・大学生の性被害の経験. 科学警察研究所報告防犯少年編, **39**, 32–43, 1998.
- 7) 原田 豊, 鈴木 護, 推移行列を用いた1970年生まれ少年の非行種別の推移に関する研究. 科学警察研究所報告防犯少年編, **34**, 165–181, 1993.
- 8) 渡邊和美, 年少者強姦事件の犯人像, 渡辺昭一(編) 捜査心理学. pp. 160–176, 北大路書房, 京都, 2004.
- 9) 長澤秀利, 性犯罪のプロファイリング—強制わいせつ, 田村雅幸(監) 高村 茂, 桐生正幸(編) プロファイリングとは何か. pp. 119–133, 立花書房, 東京, 2000.
- 10) 菅 民郎, らくらく図解統計分析教室. オーム社, 東京, 2006.
- 11) 藤岡淳子, 性暴力の理解と治療教育. 誠信書房, 東京, 2006.
- 12) Sadock B. J. and Sadock V. A., *Kaplan & Sadock's synopsis of psychiatry: Behavioral sciences/clinical psychiatry. 9th ed.*, Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, 2003. (井上令一, 四宮滋子(監訳) カプラン臨床精神医学テキスト—DSM-IV-TR 診断基準の臨床への展開 第2版. メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, 2004.)
- 13) Bartol C. R. and Bartol A. M., *Criminal Behavior: A psychosocial approach. 7th ed.*, Pearson Education, Inc., New Jersey, 2005. (羽生和紀(監訳)・横井幸久, 田口真二(編訳) 犯罪心理学—行動科学のアプローチ. 北大路書房, 京都, 2006.)
- 14) 大江由香, 森田展彰, 中谷陽二, 性犯罪少年の諸特性と性非行の反復傾向との関係—日本語版 J-SOAP-II の適用性の検証. 犯罪学雑誌, **73**, 165–173, 2007.
- 15) 法務省法務総合研究所, 犯罪白書 平成24年版. 日経印刷, 東京, 2012.